

泉鏡花作品集

第三卷



泉鏡花作品集

第三

創元社

泉鏡花作品集 第三卷

定價 二七〇圓
地方定價 二七五圓

著者

泉鏡花

發行者

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
小林茂

印刷者

東京都文京區春日町三ノ四
猪瀬英一

發行所

株式會社 創元社
（大阪）市北區橋上町四三
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

昭和二十七年三月三十一日 初版發行
昭和二十七年十二月五日 再版發行

電話茅場町（66）二〇六四・四〇八三・一七三四
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

目次

風流線……………一

續風流線……………二

解說……日夏耿之介

風 流 線

祝使 山駕籠 ふれ狀 橋の袂 急先鋒 芙蓉館 鞍ヶ嶽

異形のもの 緑の旗 手取川 邂逅 田舎酒 綾の鼓 妖

靈星 鶯籠 紫しらべ 革鞆の中 空薫 馬之部 みだれ

髪 うたがひ 浪裡白跳 寄手 禮どころ

祝使

一

「あれ失禮、どうぞ此方へ。」

と座を譲つて、旅姿の身を片寄せた娘は、道中の風に亂れた、ぼさ／＼の銀杏返。たとへば青柳の絲を洗はず、簪の花に露置かぬ狀ながら、耳許の清らかな、目の涼しい、細面の、年紀の頃九か二十、類なく目に立つのが、赤毛布でくるりと身を、草鞋穿、脚絆掛、帶の端さへ露さないけれども、包み果てぬ色は洩れて、長き旅路を來たらしく、肩にも裾にも埃を置いたが、もみちに霜の紅冴えて、視は濃濃な風情である。

床凡にかけた腰とともに、小さな風呂敷包と、蝙蝠傘を傍へずらした、店前に憩ふものは、唯此の一脚より多からぬ、田舎路の御休所。

老猫と瘦せた犬、鶏も居るけれども、客を待つ土間は凸凹の一坪半のみ。娘は先刻から憩つて居たが、後れて入つて來た十五六の美少年。髪黒く、面白く、唇朱きが、おな

じく草鞋穿、紺足袋に紺の脚絆、身輕に効々しく装ふに、肩から斜懸に革鞆の、何を納れたのか一杯に膨らんだ胴巾を、淺黄の紐で繋乎と結へた、重さうなのを腰下り。杖にもあらぬ手まさぐり、途すがら手折つたらしい、二葉三葉しをらしに残つた柳の枝の、長くしなふのを、すら／＼と纏れるやうに足を引摺り、草臥れた狀して鶴來(地名)の方から迎々と此の處へ。

敷居を越すにも疲れたらしい。重い歩を休めようとして見ると、一つの外はない床凡に、先客があつたので、大人しく先づ挨拶をしたのであつた。

「私の方から申します處を、つい、うつかり傍見をして居たもんですから。」

あとは目でいつて向き直る、土間の前の土手下は、船もあらず人も無き、渺々たる一大河、礫原赤く洲は黄也。水は蒼く、瀬は白く、彼方此方に分流して、近きは龍の臥す如く、遠きは虎の躍るに似て、目も遙なる對岸は、恰も國が違つたやう、日中も黄昏の趣あり、一帯の霰の中を、人と馬とちらはらして、森低く、屋根小く、山仄に、描ける海市に異ならず。

然れば川幅約一里、鶴來といふ村は其處に。旅の娘が動
かした瞳は、——憇る景色に見惚れたため、我にもあらず、
聲を懸けらるゝまで氣が付かなかつた——心を示して、
「何うぞ、御遠慮なさらないで、お廣く在らつしやいまし
な。」と草鞋の上へ草鞋を半ば、底をかへして、しなやかに
足を重ねる。

「澤山です、澤山です。」

少年は妙齡の美人と、膝を交へるのを極り惡げに、づつ
と片端。

此方は人馴れた風采で、

「お婆さん、お客様にお茶を上げて下さいな。」

「はい、はい。」

古板敷の筵の上、茶釜の前に、明りとりを逆に、故と暗
い方に蹲つて、目に近々と覺束ない針の運び、夏のはじめ
から山國は、繼物に忙しい白髪のはじめ、はじめて知つたか新
來の客に、しよほしよほとした目を注ぎ、

「おや、入らつしやいまし。」

と又つく／＼、床几に並んだ二人の姿、コリヤ何うぢや、
傍の納戸の古櫃に、先祖から貼つてある、大津繪から抜け
出した、お若衆と藤娘か、七夕様か、雛一對。

「難有う存じます。」と少年は茶碗を取つて、姫よりは、美
人の方に會釋する。

「どういたしまして、御挨拶で痛入りますこと。」

娘も又自分のものでも與へたやうに、故といつて、吻々、
吻々々、眞珠を揃へた齒の皓さ、冷く燃ゆる唇の花は、一
たび戦ぐ時祕曲を傳へて、上手の手が樂器の線に觸れたや
う、人をして神往かしむるものであつた。何の祕密もなく
軽い調子で、

「一寸、植物の採集にでもお出かけなさいましたの？」

まさに埃だらけの赤毛布を絡うた、其の風采を以てすれ
ば、革靴を肩に草鞋穿の姿を見れば、賣藥が賣れますかと
問ふべきに、植物云々と尋ねられて、少年は思はず顔を視
めたが、露も玉に、水も緑に映りさうな、無量の美なる意
味の籠つた美人の瞳を一目見ると、何事を思ふ暇もなく、
「何、家から使者に來ました。」

「お使者に？」

世馴れぬ狀はいふまでもない。其の草臥れた様子だけで
も、餘り長途の使者である。

「だつて御遠方からぢやござんせんかね。」

少年は川向を、優しい目で見遣りながら、

「今朝かち五里ばかり歩行いたんです。纔の途なんですが、
草臥れて了つたんです。」

時に思ひついたやうに、背後を振向き、

「お婆さん、湖の處まで最う何のくらゐあるだらうね。」

「樞は目とともに口を開け、

「芙蓉編でござりやすかの。」

「あゝ、然うさ。」

「はあ、あと最う二里半さござりやす。」

「や、二里半、未だそんなにあるのか。」

「もし、貴方様は御城下かね。」

「あゝ、」

「それは御大儀ぢや、路が悪いで増増し難儀しますで、ゆつくり休んでござりませ。」

「お婆さん、何ぞ此の方が召食るやうなものはありませんか。」

「否、今橋向うの往還で、並木へ休んで辨當を食べました。何にも欲しくはないんだけど、咽喉が渴いてしやうがなかつたから、お邪魔をしたんです。難有う。」

「年紀にも似ない、いたいけさ、唯二つ三つの弟と思ふにさへ、抱いても遣りたいほど愛らしさに、

「まあねえ、そんな遠くまで、何のお使者に行らつしやるの。」

「少年は行儀よく膝に手を置き、

「御婚禮の祝儀に、つかひものを持つて行くんです。」

案外かな。

「おゝ！ 御婚禮の。おめでたいのでございますね。それぢや御城下から、田舎の御親類へでも御遣はし？」

「親類ぢやありません、ともだちの方が縁附きました、其の人の許へ、姉さんが送るんです。」

「お姉様のおともだち、其の方がお嬢さん、あの、奥様なんですか。」

「えゝ、其處へ使者に参ります。」

「お嬢人のお祝ひに、貴郎のお使者。私もお姉様の、其のおともだちになりたいねえ、可羨いこと。」

と艶麗に打微笑む。

三

聊も隔てのない、打解けた美人の舉動、唯問はるゝにのみ纔に答へた少年も、此方より、ものいひかく不便を得たが、貴女とも姉さんとも申しかねた口ぶりで、

「ですが、あの、何處へ行らつしやるんですか。」

「私。」

「えゝ。」

「私は當なしの旅鳥。」

「娘は傾を襟につけて、打傾き、片袖を靜に拂ふと雪のやうな、指尖で左の肩を細りと、赤毛布を軽く弾いて、

「妙な色の鳥なこと、お國には、こんなのは居ないでせう。これは天竺てんじくの鳥なの。」

「嘘うそを、天竺にだつて、阿蘭陀オランダにだつて、鳥の赤いのが居るもんですか。」

「だつて、こんな邊鄙へんぴにも、貴郎おなたのやうな可愛らしい方が居るんですもの。然うすりや百里も離れた、私の方へ來て御覽なさい、赤い鳥はいくらでも飛んで居ますよ。」

餘の事に笑ひ出して、

「嘘つこは止して、お國は何方どち。」

「眞個はね、東京。」

「東京？」少年は目を睜ひらつた。此の邊の悠々年紀しうしうきねいごろでは、東都は十萬八千里、一種神聖なる天上界と思惟するるので、さしむかひに居る自分是如何、五里の路に疲れたのに、年紀は上でもかよい女が、何うして此處までと怪むなりけり。

夢見るやうに、

「大變ですなあ。」

「些とも大變なことはないの。最う二十里ばかりさきからは、汽車がありますからね。あとは目を瞑しめつて居ても行かれるんですよ。連れて行つて上げませうかね。」

「否いや、もつと修行しゆぎやうをして、立派なものにならなければ不可ませんが、お嬢さん。」

少年は旅鳥といふものを稱するに、今や令嬢を以てした。

「これから其の東京へ歸るんですか。」

「まるで、西東にしとうなの！ 私わたしは貴郎とは行違ゆまちがひにお城下の方角でせう、向うへ行きます。鞍ヶ嶽くらたけといふ山があります。」

「鞍ヶ嶽。」

睫に近き一座の山、其の空ばかり雲暗くもき、五月晴さつきはれの空を指して、

「あれ、あの山の續きで、此の川の水上ですつて。行つたことはありませんが、地理の本で習ひました。それでは鞍ヶ嶽へ上るんですか、女ぢやありませんか。」

「何故ですえ。」

「だつて、此地方こちやうのものだつて、めつたに上るものはないんです。」

「でも、おともだちの御祝儀にさへ、貴郎は其の芙蓉の湖とやらへ、お使者においでなさるんでせう。私は良夫を尋ねて行くんですもの、何でもないの。」

「やれ、はあ、お前様、御亭主ごていしゆさ、天狗様てんぐさまか、魔物まものか。」

と軀からだは唐突に頓興とんきやう聲、目は疎いが、耳は然までにならない。

娘は背方うしろへ手をついた、仰ぐやうにして、悠然と軀を見遣り、

「はゝゝ、鳥の亭主に天狗は可いねえ。でも此方の色が赤いのだから、對手の鼻は低いかも知れないよ。」

「いや、鼻高様より可恐しい事がある。なか／＼行かれるものではないが。」

納戸の破襖を半ば開いて、咳びた聲して言ふものあり。

四

二人が休んだ床几とは、左手に狭い、朽ちた縁側を隔てたばかりの、襖越に人の氣勢、お若衆と藤娘が其處を抜けて出たらしい、大津繪の古襖の破目に、ちら／＼衣服が見えたのを、大方内の軀に對する、尉殿であらうと思つたが、慥くて形を露したのは、非ず、年配四十有餘、商とも見え、工とも見え、農とも見えない、面に大人の風あつて、身装は山家を其まゝの、雜とは村夫子。

膝の前に、塗の禿げた茶盆を控へて、煙管を手に、胡坐、片手で撫でて居た百日紅の根をくりぬきの、煙草盆を押遣つて、縁側へ體を捻向け、

「はい、誰方も。これから唐突に御無禮しました。唯今鞍ヶ嶽へ上らるゝといふを、襖越に承つたに就いて、お心づけ申します。はい、此の邊はな、見らるゝ通り、都に遠い山里で、峰は高し、樹林は深し、川は大いな。

此の手取川の淵一ツに、一ツづ／＼にしてからが十や二十

の主は居ます。魔の棲まぬ處はないが、殊に其の鞍ヶ嶽は總本家ともいふべきぢや。御婦人の身一ツで、なか／＼行かれる場所ではない。けれども、天狗に許嫁があるやうに言はれるからには、其を恐れはなさるまい。其の事だけなら留めませぬが、能く聞かれえ。」

村夫子は煙管を差置き、

「今さしあたり草木も動かず、五月晴の上天氣、澄切つて秋日和見たやうぢやが、何と其の底に黒い雲が徐々と頭を出して、はや此の界限、漁るものも耕すものも、寐心が穩でない。先々月あたりから、毎晩悪い夢に壓されて居るではないか。

それがといふとの、北から南へ三十里ばかり、間が切れて居る鐵道が繋がるで、工事が去年から始まつた處、いや其の工夫といふのがよ、大概つもつても知れること、今時そんな理窟はない筈ぢやが、百が九十九人までは、どれも無宿もの同然で、殺人に放火をかねた、夜叉羅刹ぢやと思はれい、はあ。

山は崩す、水は濁す、犬猫は取つて喰ふ、草は枯す、樹は倒す、石は飛ばす、取分けて目指されるのが、眉目形の勝れた婦人ぢや。

殺されたものもあり、死んだものもあり、好い衣服を着て帶をめたのが、草の中に倒れて居たり、裸體で野原に曝

されたり、何がさて、出来た鐵道の三里居まはり、手足な、髪な、ばら／＼にして暴れ居つたわ。

何と可惡い、二條の鐵の線は、／＼と這ひ込んで、

最うそれ、昨日一昨日あたりから此の川上で舌なめつり、丁ど貴女が行かれるといふ、鞍ヶ嶽の麓は、鎌首を擡げる處ぢや、私の留めるのは此の事だ、はい。」

煙管を取上げ、流を斜に遠山の頂かけ、殺勢を示してびたりと構へ、陰鬱な顔色して、

「見られい、今日のお天氣も、鶴來といふのに五位鶯が鳴きさうな空合ぢや、太陽様はちやんと照らしてござるが、日中も蔭には闇があります。都と違うて邊土ぢやで、警察の手が届かねば是非もない。危きには近寄らずぢや、遠く退いて居るに越したことはないに因つて貴女、悪いことは言はぬ。まづ私の相談に乗らつしやい。」

懇な言につれて、煙管が宙に動くのを、瞳を流して熟と見たが、傍に憂慮しげな少年より、當の娘は事ともしないで、

「いろ／＼難有う存じますが、まあ、兎も角も参ります。」と判然いひ切る、眉宇に一點の懸念もなささう。

五

村夫子はランといつて歎息した、半ば眼を閉ぢ、打傾き、

「はあ、其では斷つてお出かけかな。」

美人は些も意に介せず、晴々しい面色で、少年に瞳を返した。

「私はまあ、こんな旅鳥だから、人の目にもつかないでせうが、貴下が其の御祝儀を持つて行らつしやる、お姉様のおともだちなぞは、もし今のお話のやうだと、御心配なことですね。」

少年は頭を掉り、

「内の都合がありましたから、私どもの祝は後れて居ますが、其の婚禮は最う疾くに濟んだあとなんです。途中何處を通るといふのでもありません、其の奥様は、湖の別荘に居るんですから。」

「それぢや別條はありませんかね、そして其處らは、可惡い工夫たちの近寄らない處ですか。」

村夫子引取つて目を睜き、仰山に頷いて、

「まるでかけ離れた極樂淨土、工夫どもが鶴の背で突擲す、埃一ツ來ぬ清らかな湖で、然も大船に乗つたやうな安心な處ぢやが、何うだらうな、貴女料簡を變へて、私がいふ事を背いて、一先づ湖の方へ來られぬか。」

私は其の邊の田舎のものをぢや、好い宿を世話して進ぜう。其處へ落着いてから、人を雇ふなり、連を見計ふなり、それとも逢ひたいといはつしやる人を、都合に因つたら此方

へ呼ぶなり、何とか相談の仕方であらうで、悪い事は申さぬが。」

「ですが、あの私は少々急ぐんですから。」

「そ、そ、それが若い。」

とじりゝ乗出し、

「其の鞍ヶ嶽に居さつしやるは、人か鬼か存ぜぬけれど、途中、貴女の身體に又然うでもない、もしもの事があつたら何うされる。先方へおいでなすつて、却つて泣きを見られるぢやらう、しばらくの辛抱ぢや、逢はぬが増かも知れませぬ。」

村夫子は大聲に、

「なあ、此家のお婆さん。」

「然よぢや、然よぢや。」と軀は背屈みをして、針仕事とともに身を入れた。

少年は左右を顧み、いづれが是とも定めかねた、頼りない目遣で、人事ながら心細げに、旅のあはれは是よりぞ知しぬる風情。

疾くも見て取り、

「あゝ、其の少人、姉さんは、御思案中ぢやがの、何は兎も角、貴下は私が案内します。城下から此處の湖へおいでなさる、此處までは然までにないが、これから先は川について難澁な傍路へ入ります。見受けた處、くたびれて居ら

やる、又土地のものは、馴れて近道も知つて居るで、幸ぢれ、一所に來られえ。」

「可い都合でございますね、貴下、伯父さんをお願いなすつて、ぢや、然うして行らつしやい。ね、」

と頷かせるやうにいつた。

少年は一議に及ばず、

「何うぞお願い申します、飛んだ御厄介でございます。」

村夫子は我が深切の届いたのを、然も心底から喜ばしげに、飲込み顔、飲込み顔。

「一所においでかな、然うか。いや安心して來られい、田圃道に水溜があつてからが、華奢な身體、抱いて越すに仔細はない、又な。フトすると此處へ、渡船ぢやないが、村方へ魚を廻す漁船が、芙蓉湖へ歸路に通ることがある。あれば徐々來る時分、實は休みながら私も心待にして居ます。其の少人、船が嫌でなくば、景色を見ながら乗るも可から。何うぢやな、姉さん、貴女も相談に乗る氣はないかの。」

「私は乗つても山駕籠です。」と屹として、まともに川、遠山を仰いだ眉は、青柳の霞を拂つて、曇りなき月の顔や。

山駕籠

六

「へい、煙草が名物でござりますで、家並刻みます、鶴來煙草と申しますと、聞えたものでござりやすよ。」と後棒を扛いだのが、土地自慢で得意に語る。東海道の雲助は、音の響きと心持で、蜘蛛、と可恐しく聞えるが、此の邊のは、草色筒袖の襦袢に、膝切の緩んだ股引、芋蟲ころころとした形、先棒もこれに同一、それ信州の鴛籠昇は、畑主なり蕎麥の花、土地が土地だけ、煙草に附く、蟲のやうなものかも知れぬ。

山鴛籠の中で旅の女、苔は堅いが葉のすら／＼とある菖蒲一本、荷物は上へ、屋根裏に挟んだのを、涼しさうに視めながら、溪川の流のふち。

「あゝ、然り。道理で一軒々々、店も、土間も、屋根の上まで煙草の葉だつたね。まるでみぢの中を通つて来たやうな心持がして、薄ら寒いよ。」と彼の赤毛布を被たまゝであつた。

前を扛いだは無口な男で、話は後棒が却つて先棒。

「へい、實に最う時候違ひでござります。つい前の白山は、これから盛夏になりまして、谷々の雪が解けませぬで、此の界限は大した暑さといふことを存じませぬ。」

「おや、あの白山は直き其處なの。」

「纔かばかりでござりますが、山又山で、道はなか／＼難澁でござります。えゝ、私どもをお雇ひ下さりました、今

の煙草の鶴來から、金剣宮と申すのを拜みまして、白山、小白山、吉岡、吉野、木滑村、それから中宮の温泉に成ります。其間ザツと峰續きで、三方岳、奥三方、千丈平、笠岳、山廻りの天狗様も、一息ついて休まつしやります。御腰かけと申す頂から、妙法山でやがて、白山でござります。背後は早や飛驒の國で、ものの十里とはないのでござりますが、つひに昔から越したものはござりませぬ。

其の中宮の温泉に参りますと、もし、お嬢様え。」

「おう。」と先棒が聲をかけた。

「そらよ。」

と肩を入れかへる。流が颯と、鴛籠は巖摺に石高路、水の激するに異ならず、一揺れ揺れて、ザツと出た。

美人は靜に、

「あゝ、何だね。」

「貴女さま、鶴來へおいでなされます前に、お越しなされたでござりましよ。あの手取川の上を挟んで、中宮と白山下と、向ひ合つて居るのでござります。」

「皆、度々行くのかい。」

「参りますとも。私どもは稼業でござりまして、其の中宮へ湯治に行くお客を乗せましたために、怎うやつて、影法師のやうに、何處か在所の隅に活残つて居ります人足でござります。それも澤山はござりませぬ。銭金で腕車は動か

ず、馬は厭だとおつしやるお方ばかり。これでも暑中になりますれば、三日に一立ぐらゐづゝ、賃錢が頂けます。」

「而して何なの、私が行く鞍ヶ嶽は、矢張其の路を通るんですか。」

「いんえ、違ひます。鞍ヶ嶽は其の三方ヶ丘、奥三方なんぞの、取着きの難所でござりまして、申さば入口の山門でござりますが、いやもう何の道も、奥の院は、ものごと騰揚で業が穩でござります、けれども、得てして御門番の衆が、意地くね悪く手荒いのでござりまして、うつかり茸狩に入りまして、どつと足許で水が出たり、目の上で火が燃えたり、六尺棒のかっぱらひで、豪く驚かされるでござりますよ。」

「これ、はあ、六尺棒だの、門番だのと、見下げた口を利くめえよ。お山は近いに、當事もねえ。」

と先棒が苦つた聲。

「おつと躓。」

といふと石塊に踏みかけて、駕籠がぐら／＼となる。

「それ、見せえ。」振返つて、だんまりが濫い面。

七

屋根うらに掛けた葺蒲ほど、乗つた美人は身動きもしなかつたが、不圖其の耳を欹てたのである、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

先棒の肩の上から、後棒の腰の脇から、路の前後を透したが、露骨な岩山の膚を右に、瘡せた畑を左手に見るのみ、十町四方殆んど人らしいものの影もない、但遙に畦を行く、馬士の寸と、駒の尺、日は當つても影を見るやう。唱名は判然と近いから、

「若い衆さん、お寺があるの。」

「別にお寺はござりません。唯此のさきへ参りますと、比叡神社と申して名高い白山のお宮がござります。」

「でもお念佛が聞えるよ。」

「はあ、彼でござりますか、ありや、何でござります、大巖の傾斜地蔵を拜むのでござります。」

「かたがり地蔵？ 妙な名だね。」

「御覽じまし、細ッこい此の谿川の流の岸は、悠うやつて巖が屏風を立てましたやうでござりませう。其の上へまた巖がいかいこと押かさなりました中から、一個、圓になつて飛出して居りますのが、直ぐお顔でござりまして、三丈ばかり、見上げるやうな自然石へ、御像が刻んでござります、路傍の如意輪様見たやうに、何でも願をかけます事を、合點々々の形で、頭を傾けて在らつしやいます、其處で人が傾斜地蔵と申すでござります。えゝ、むかし其の、豪い貴い坊様がお刻みなさりましたさうで、なあ、合棒、何と

かいふ坊様だッけや。」

「泰澄様よ。」

「それ〱、役の行者か泰澄様かと謂はれたお方のござります。験がござりますに、お嬢様御參詣なさりまし。」

「ぢやあ、直ぐ巖に刻んであるの。」

「然やうでござります、へい〱。」

「頼母しいねえ、路々聞けば、山には恐しい魔が棲むといふのに、巖が其のまゝの佛様もおいでだよ。」

南無阿彌陀佛々と早や耳許に聞えると、後棒も口の裡で南無阿彌陀佛々々々。

「南無阿彌陀佛。」先棒も調子を合せて、山駕籠は土の上、新木の高い小屋がけの前を下りた。小屋は唯柱で支へて、屋根ばかり。山路の石も草も、其のまゝの土間にして、櫓を入れた桶が三ツ四ツ、流の岸の巖に載せて柄杓が又二三本、柄を此方に向けて斜遠に差置かれた。入口に床几を据ゑ、敷物をかけて、一人、袴を一着に及んだのが、傍に小さな机、帳面を開いて往來をじろじろ見て居る。

「此處かい。」駕籠の中で、美人はもつれ毛をかけた頬を傾け、顔を外へ、日を遮つた薄暗い土間を透して、下から見上げるやうにすると、仰ぐばかり高い屋根の、向の廂は纔かに御胸の邊なり。正面の巖石一座、苔滑かなる法衣を絡ひ、蔓葛を袈裟にかけて緑青の色堆く、暗き山かと立た

せ給ふ。御顔を衝と差向けて、人を見給ふ風情、拜むものと目を合せて、微笑ませ給ふに似たり。然も其の偉大なるや、前に五百の衆生を置きて一切平等、蛙の干物も御目ざしの惠の露には洩れじとこそ、悚然として寒氣のするまで、袖、袂に、清水の點滴、其處ばかりは淵をなして、山寺の鐘も沈むべく、耳に絶えなかつた谿川の響も絶えて、松風が颯と吹く。

八

後棒は襟を擴げて汗を拭いた、手拭を膝に掴んで、小腰を屈め、

「えゝ、お草鞋を脱いでいらつしやりますで、此處でお詣りなさりまし、御面倒でござりませう。」と心づける。駕籠を出るには土間へ跣足であつたから。

けれども居ずまひを横にして、美人は、石像を正面に向直つて、

「それぢや餘り失禮です、下りませう。」といふ處へ、息杖を差置くと、直ぐに小屋の中を一文字に、影寒きばかり澄切つた川のふちに行つた先棒の無口なのが、柄杓に一杯流を汲んで、柄と兩端に兩手をかけ、胸のあたりへ捧げながら、御手洗を齎らした。

「へい。」

「まあ、お世話ねえ。」と荒漢あらがものこの然もだんまりの、恚いかるしんせつ、思ひかけざる狀さまして、嬉うれしさうに情を含んでいつたが、

「一寸待つて。」手を白やかな咽喉に懸けると、襟を結んだ手拭の端を解く、先づ片袖、よろけ縞のお召の袷、紅なし友染の長襦袢は絞しぼり、葛蒲はなびら、花片に膚を包んで、八口から、しつとりと、駕籠にかゝつて、はらりとなる。留南奇の蕪人わうじんを打つやうに、淺黄あさぎの小柳こやなぎ襦子じゆし、猫鉈ねこぢり入の帶を漏れて、姿を蔽おほふた赤毛布あかぬい、するりと撫肩の背を落つれば、かさねた踵かかとの蝶ちょう白く、狂くるふが如ごとき牡丹花ぼたんがはは、燃立もえだてつばかりの背負上せうじやうであつた。

「憚り様。」

「はッ、」といひながら先棒は、餘りの艶麗ちやんれいさに、堅くなつて、ぶる／＼しながら、加減なしにどッ、一浴ひとあびせ。水は掌の白きを透して、颯と土間へ、流るゝのであつた。

後棒は又此の小屋守とでも云ふ風な、帳簿を控へた男の前で、二ツ三ツ續け様にお辭儀をしたが、やがて渠かれが乗つかつた床凡の下から、其の穿物であるらしい、齒のさゝくれと共に臺の廣い日下駄ひよりげたを撮み出して、此方に向返る途端に一目、はじめて彗星よりも驚いたのは、美人の胸に、

闇に星の光を曳いた、燦たる時計の黄金鎖きんごくさ。

「召しまし。」

「皆、こんなに御苦勞を掛けて濟まないね。」

髪のもつれ、背のゆらぎ、片膝立てた、右の裳、軽く穿物にかゝつたが、不圖ふと隣へる狀である。

時に拜み果てて一人、田舎親仁、小屋を罷出る體で、川と御像を背後にしたが、繪馬一ツない小屋の屋根、ちらちら弱くさす日の光を、あんぐり口開いて當所なく胸し／＼、後棒の後と床凡の前を、横に抜けて出ようとする。

「待て、待たなか！」と呼んで留めたのは、古袴の小屋守で。

這奴物しやつありげな面體、御佛にかしづく者には似ず、昔々九郎判官吟味のため、新に据ゑた關所の頭人、富樫殿の御内にて、落葉轉倒太といふ風あり。今や稀に、役場の受附に於てこれを見る。

九

轉倒太は田舎漢いなかものに一腕を呉れて切口上。

「これ／＼、素通りをしてはならんよ、待ちなさい／＼。」

「ひやあ、何でござえすけえ。」

「何でござえす？ 何でござえすぢやない、何分の寄進きしんに附いておいて、お鳥目をお上げといふのだ。」

田舎漢は腕組の下へ、懷の財布を大事に壓へて、